日本台湾学会ニュースレター
VOL. 51
OCTOBER, 2026

巻頭言

第28回学術大会は5月23～24日に立教大学で開催され、成功裏に幕を閉じました。シンポジウム・分科会での充実した討論の時間も、歴史を感じる美しい会場での懇親会のひとときも、参加する側にとってはあっという間の二日間でしたが、すべてが円滑に進んだ背後には、半年以上前から入念な準備を進めてくださった大会実行委員会の皆さんの多大なご尽力があります。特に委員長の湊照宏さんは、多岐にわたる大会運営のロジスティクスから、大会シンポジウム「1970年代台湾社会の変容」の企画、研究報告までを冷静沈着かつ完璧にこなし、「シゴデキ」というのはこういう人のことをいうのだ、と感嘆しました。副委員長の木村自さんにも大変お世話になりました。実行委員の大東和重さん、清水美里さん、鶴園裕基さん、深串徹さん、福田円さんのご協力にも深く感謝申し上げます。

立教大学大会の一月後に、ノッティンガム大学で開催されたTaiwan Research Hub 2026という学術会議に参加する機会を得ました。ロビン・フッド伝説で知られるイギリス中部の小さな大学町で、二日間にわたって行われた英語での議論をききながら、台湾との物理的な距離、文化的歴史的な隔たりが研究対象との距離の取り方に及ぼす作用について考えずにはいられませんでした。

台湾に身をおき、中国語（台湾華語）で交わされる台湾の政治経済情勢をめぐる討論に参加するとき、私たちは、用語の選択から、事実認識、思考や判断にいたるまで、台湾をとりまく厳しい外的環境の影響や、台湾内部の政治対立の構図と無縁ではいられません。いくら研究者としての俯瞰的、客観的な立場を心がけていても、親しい研究者や友人の意見からの影響を免れません。台湾という強い磁場の発する力は、地域研究に不可欠な現場感覚や研究へのパッションの源泉となりますが、台湾から遠く離れた場所で議論をしてみると、その磁場から離れることでみえてくるもの、自由に論じられるものがあることに気づきます。そして、日本は、台湾の外部にありつつ、その磁場に最も近いところにあるがゆえに、世界の台湾研究のなかで独自の位置を占め、独自の責任も負っていることを感じます。

2027年5月22日(土）、23日(日)に開催予定の第29回大会の会場校は熊本学園大学（実行委員長：田上智宜さん）です。今の日本でおそらく最も強く台湾の磁力が作用している場であろう熊本で、皆さんと活発な議論ができることを心待ちにしています。



川上桃子 理事長

学会運営報告

第14期常任理事会において、下記の検討を行いました。

・第29回学術大会関連
・学会規約の改正案
・理事選挙のスケジュール
・若手の研究活動助成制度
・学会活動に伴う各種経費の運用

＊常任理事会、理事会、会員総会の抄録は学会HPより閲覧が可能です。
（https://jats.gr.jp/rijikai/rijikai.html）

特集：第28回学術大会を振り返って

第28回学術大会を2026年5月23日（土）、24日（日）に立教大学池袋キャンパスにて無事開催できたことを報告いたします。2024年12月に当時の北波道子理事長より、2026年開催学術大会の実行委員長を引き受けることが可能かどうかというメールをいただきました。「何とかなるだろう」と引き受け、前大会実行委員会からの引継ぎで「これは大変だ」と顔面蒼白になりながらも、多くの方々に助けていただき無事に開催できました。私が引き受けたばかりに、開催校の会員であるがために副委員長にならざるを得なかった木村自会員の多大なサポートのおかげで、何とかなりました。このほかにも、ご協力いただいた大会実行委員、理事会、事務局、アルバイト（院生・学生）の方々に感謝申し上げます。5月23日（土）午後に公開シンポジウム「1970年代台湾社会の変容」、続いて会員総会を開催いたしました。その後の懇親会には100名が出席し、交流を温めました。翌24日（日）午前・午後の分科会は、4教室・11分科会（計21報告）に分かれ、各会場ともに熱気のこもった報告と緊張感のある質疑応答が展開されました。各分科会の座長、報告者、コメンテーターの方々、大変お疲れ様でした。公開シンポジウム・分科会参加チケット（有料）購入者数は181名（会員145名、非会員36名）、非会員の公開シンポジウム参加チケット（無料）購入者数は50名でした。盛況と言い得る大会にしていただいたすべての参加者に感謝申し上げます。　(湊照宏／立教大学)

公開シンポジウム
1970年代台湾社会の変容

公開シンポジウムは5月23日（土）午後に開催されました。まず湊より、1970年代の台湾を対象にして「経済」と「社会・文化」との相互影響を考察し、異なる学術領域間の「対話」を目指したい、とする趣旨説明が行われました。その後、湊が新中間層の生成と耐久消費財の普及について報告しました。湊の報告が統計データに基づく量的変化を示すものであったのに対し、その後は、当時の質的変容をイメージし得る報告が続きました。

洪会員がジェンダーの視点から耐久消費財の普及による家族や生活様式の変容について報告し、続いて前野会員が当該期のフィールド調査で記述された村落の状況について報告し、最後に三澤会員が当該期映画において耐久消費財がどのような記号として機能していたのかについて報告しました。

各報告間には「政治」を専門とする司会の福田円会員によるコメントを挟み、フロアからは各専門領域からの有意義な質問が相次ぎました。趣旨説明文に記した通り、「日本台湾学会の地力と可能性」を示していただいたすべてのシンポジウム参加者に感謝いたします。(湊照宏／立教大学)



当日のシンポジウムの様子（提供：湊照宏会員）

司会：福田円（法政大学）

第1報告：湊照宏（立教大学）
「新中間層の生成と耐久消費財の普及」

第2報告：洪郁如（一橋大）
「大衆消費社会の形成と家庭の変容」

第3報告：前野清太朗（金沢大）
「『残余中国』の民族誌をよみなおす
――変化の渦中の記録として」

第4報告：三澤真美恵（日本大）
「台湾映画にみる社会の変容」

分科会報告

第１分科会（自由論題 教育史／建築・都市史）

座長：上水流久彦（県立広島大学）
報告１：陳虹彣　（平安女学院大学）
「学校文書にみる終戦直後台湾の初等学校運営―政権移行期の教育現場に着目して―」
報告者２：三文字昌也　東京大学／東京芸術大学
報告タイトル「台南市中西区に残る民国前11年築の閩南式建築の調査報告
―日本統治時代および戦後における閩南式建築とその周辺環境の改変を読み解く」

コメンテーター１：山崎直也（帝京大学）
コメンテーター２：菊地暁（京都大学）

陳会員は政権移行期の学校日誌・沿革誌・公文書綴から８月15日以後の既存業務の継続、行政指示以前の言語の切替、日本人教職員の処遇の段階的手続等を明らかにし、政権移行期を「継続を基盤とした転換」として捉え直した。コメントでは貴重な史料に基づく実証性を高く評価しつつ、より大きな時間的・空間的広がりの中で断続か継続かを問うべきとの指摘があった。フロアからは日本人教員と台湾人教員の給与格差や校長の省籍、問題意識等の質問があった。報告者は指摘された課題の重要性に同意した上で、これらの問いを考えていく出発点的研究であると応答した。三文字会員は台南の築132年とされる閩南式建築に関し実測調査等から所有者、当初形態と改変経緯、周辺環境の変容を調査時の写真を多く用い提示した。コメントではこの建築的変遷が生活空間・生活主体の如何なる変遷を示すのか、「進」と「進」の間の空間はどのような変遷があったのか、台湾民家史に如何に位置付けられるかが、フロアからは分析の視点が問われた。報告者は、設計する側ではなく、居住する側の視点からの分析意義や近世から日本・国民党統治時代、現代へとつながる都市空間の形成と変容から分析する価値について説明した。
（上水流久彦／県立広島大学）

第2分科会（自由論題歴史学／社会史）

座長：鶴園裕基（香川大学）
報告１：福田琛（一橋大学大学院）・松葉隼（福岡大学）
「個人資料から見た「台湾経験」の諸相：磯部正男における美術を通じた戦前・戦後の連続と台湾「再会」」
報告２：樋口祐熙（一橋大学大学院）
「戦後日本における台湾からの引揚者の記憶の在り方――世代の視点から――」

コメンテーター１：角南聡一郎（神奈川大学）
コメンテーター２：游乃蕙（国立歴史民俗博物館）

福田・松葉両会員による第一報告では、植民地期台湾に渡り、教鞭を取るかたわら絵画制作に取り組んだ磯部正男の足跡をたどった。台湾において陳澄波の美術指導を受け、引揚後も日本作家からの影響を受けつつ画業を続けた磯部の経験を、当人が残した資料を紐解くことを通じて、台湾経験の記憶の「再構成」のあり方を浮かび上がらせた。以上に対する角南会員のコメントでは、台湾経験を持つ文学者、考古学者、民俗学者などの経歴をもとに、戦前と戦後の経験の結びつき方を比較する観点が提起された。樋口会員の第二報告では、台湾引揚者の、世代ごとの台湾経験・引揚経験に関する語の特徴を分類した。すなわち、統治エリートとしての経験が色濃く反映した第一世代、台湾において少年期を過ごし、語りが多様化した第二世代、断片的に台湾の記憶を持ち、自らのルーツとして台湾をまなざす第三世代に分け、それぞれの多様な内実を検討した。これに対し游会員のコメントでは、引揚者の台湾認識が世代を超えて継承される場合もあるため、世代的差異の基準そのものを問う必要があると指摘した。その上で、他地域の引揚経験を参照しつつ、引揚者を分析概念化する必要性を提起した。
（鶴園裕基／香川大学）

第3分科会（政治史）
日華・日台関係の連続と変容――戦後処理問題と在日華僑団体

座長：五十嵐隆幸（目白大学）
報告１：岡野（葉）翔太（神戸大学）
「承認されていた存在から、非承認の存在へ――親中華民国派華僑団体から見る断交後の日華関係（1972-80年代）」
報告２：黄美恵（中国文化大学）
「日台間における懸案解決―90年代台湾に対する戦後処理問題と「確定債務」をめぐる日本政府の取組」
コメンテーター１：菅野敦志（共立女子大学）
コメンテーター２：前原志保（アジア武雄大学）

本セッションでは、1972年の日中国交正常化以降の「断交後」の時代に焦点を当て、公式外交ルートが存在しないなかで、日台関係がいかに維持されてきたのかを検討した。岡野会員の報告では、親中華民国派華僑団体の活動を通じ、国家による「承認／非承認」だけでは捉えきれない、生活実務や地域社会に根差したネットワークの継続性が示された。黄会員の報告では、台湾人元日本兵問題や「確定債務」問題を素材として、交流協会を通じた非公式交渉や議員外交の役割、さらに日本側の「政治的誠意」と台湾側当事者の求める「尊厳回復」との認識のずれが論じられた。

これに対し、菅野会員からは、社会史的・民間的アクターへの着目の重要性とともに、そうした議論が国家中心の枠組みに回収される可能性について問題提起がなされた。また、前原会員からは、親中華民国派華僑団体の実務機能や地方交流の実態、議員外交の限界、台湾側の記憶・アイデンティティ形成との関係について重要な論点が提示された。本分科会を通じて、「断交」は関係の断絶ではなく、非公式ルートや民間ネットワークを通じた新たな日台関係形成の出発点でもあったことが改めて確認された。

（五十嵐隆幸／目白大学）

第4分科会
（自由論題　文学／歴史学）

座長：豊田周子（名城大学）
報告1：和泉司（東洋大学）
「邱永漢の単行本未収録小説についての分析―『中学一年コース』掲載「ヤシの実ひとつ」（1960–61）を中心に」
報告２：冨田哲（淡江大学）
「「マスコミの王様」大宅壮一が語った台湾―『黄色い革命』（1961）」
コメンテーター：張文菁（愛知県立大学）

和泉報告は、邱永漢の小説「ヤシの実ひとつ」（1960）について、冨田報告は大宅壮一の『黄色い革命』（1961）の「台湾」の章について論じたものだった。まず、双方のコメンテーターを兼ねた張文菁氏より二報告に共通するコメントとして、作品発表時の在日華僑の思想的多様性や、在日台湾人の左傾化の有無について、また1960年前後の日本では社会主義の実現がまだ選択肢として残されていたのではないかとの指摘があった。

一方、フロアからは、少年小説に台湾問題（国民党統治批判）を盛り込んだのは無理があるとの和泉氏の見解をうけて、当時の中学生の知的リテラシーに鑑みれば可能ではないかとの意見や、物語展開から本作は「冒険小説」とも見做せるのではないか、文革を含む左派思想の影響はなかったのかなどの質問が出された。和泉氏からは、60年当時の邱は反左派的な立場をとっており自民党政治家への接近もみられること、小説の結末の分析とともに、これらの問題にも再検討を加えたいとの回答があった。

冨田報告には、フロアから、作品において邱永漢の果たした役割をどう評価するかという問いが出された。冨田氏からは、作中に登場する、東南アジア各地の協力者に比べても、台湾の章の執筆協力者である台湾独立運動活動家の邱はかなり特殊だが、大宅の蒋介石政権批判は中国共産党への共鳴からくるものとは性質を異にしており、台湾社会の「日本ブーム」についても冷静なまなざしが見て取れること、また50年代後半の大阪人に関する「阪僑」論から、大宅自身が華僑に強い関心を持っていたことも窺われるとの応答がなされた。

（豊田周子／名城大学）

第5分科会
（自由論題　社会言語学／言語政策）

座長：中川仁（明海大学）

報告1：吉田真悟（一橋大学）
「国家言語発展法」の理念－2023年「国家言語発展法報告」の分析から」
報告2：呉素汝（東海（TUNGHAI）大学）
「台湾桃園市の中壢駅前「中平商圏」における多言語景観に見られる特徴」

コメンテーター1：藤井久美子（東洋大学）
コメンテーター2：林初梅（大阪大学）

報告1は、吉田真悟会員による2019年に施行された「国家語言発展法」の理念について、その後に出された「国家語言発展報告」の内容から分析するものであった。とくに民主化以降の台湾における単一言語指向から多言語主義への転換は、中国語(華語)も台湾化した言語として国家言語の位置づけになるなど、包摂的な枠組みが具現化されていく流れのなかで、その名称や言語の機能的な平等性において課題が残るものとした。この報告を受けて、コメンテーターである藤井久美子会員は、「国家言語」の範囲や名称が具体化された点を評価しつつ「四大族群」との関連性と「大華語」との関係性にも触れ、その詳細を述べた。 そして「華語」についての議論もなされ、林初梅会員から「華語」に対する見解が述べられた。

続いて報告2は呉素汝会員の桃園市における「中平商圏」の多言語景観の状況を実証的に考察し、且つ台湾の「新住民」の言語環境を検証したものであった。「華語」や「英語」の表記形態が優勢に立ち、一方で東南アジア地域における諸語が限定的に使用され、商業的な戦略や社会的な関係が表記形態において言語選択に反映されるという実態を具体的な数値をもって提示し、その言語状況の実例をも含める形を示唆するものであった。その報告を受けて、コメンテーターである林初梅会員からは言語選択の諸要因における分析が推測的であるという指摘があり、台湾における本土言語の分析対象についての課題が残るという意見が述べられた。この度の両報告については、台湾社会における言語の多様性とそのあり方を再度、検討していく課題となったものといえる。
（中川仁／明海大学）

第6分科会
（自由論題　社会学／政治思想史）

座長：清水麗（麗澤大学）

報告者：劉承衛（筑波大学大学院）
「権威主義体制下の台湾言論界の日本認識―『自由中国』を中心に―」

コメンテーター：今井淳雄（天理大学）

劉報告へのコメントでは、日本関連の記事102本のうち、社説22本と徐逸樵の記事18本に分析が集中している点について、特定の人物や記事に偏ると、一部をもって全体の結論としている印象を与えるため、「ちらばっている」残り約６割の多様な言説の内容を示す必要があると指摘された。また、『自由中国』が1970年代以降の党外運動に影響を与えたとされる従来の議論をふまえ、民主化後の市民社会との連続性について、先行研究をふまえたより踏み込んだ分析が求められた。

また、フロアからは、先行研究や他の言論者との比較を通じて、『自由中国』の日本言説の特徴を明確化する必要があるのではないかとの指摘がなされた。劉は、投稿数や独自の論説、編集部による高い評価から徐に注目したと説明しつつ、知識や情報を得る手段と機会に不平等があった1950年代には結果として発信力の強い外省人の言説が中心となり、『自由中国』はその後の市民社会の言論空間の一源流ではあるが、直線的に連続すると見ることには再検討が必要だと応答した。
（清水麗／麗澤大学）

第7分科会
（自由論題　法社会学／社会史）

座長：八尾祥平（ノートルダム清心女子大学）

報告１：許仁碩（北海道大学）
「日本の植民地統治下台湾における社会運動への越境的ポリシング
――『台湾警察協会雑誌』に見る認知的枠組みの構築過程――」
報告２：郭書瑜（一橋大学大学院）
「戦後日本におけるもう一つの台湾――来日台湾人支援支援運動と
台湾政治犯救援運動における植民地台湾経験者のまなざし――」

コメンテーター１：浅野豊美（早稲田大学）
コメンテーター２：林政佑（中央研究院）

第一報告は、植民地台湾でのポリシングについて、従来の警察側の史料に分析の重点をおくのではなく、警察と社会運動の主体である市民社会との相互作用という枠組みから捉え直した。第一次大戦期にはデモクラシーなどの政治思想への警戒の比重が高かったものの、1930年代からは思想についての記述は減少した。このことは社会運動への統制が緩まったことを意味せず、むしろ、ポリシングが組織内でより高度化した結果であることが示唆された。第二報告は、1960年代から1970年代にかけての在日台湾人への支援運動や台湾政治犯救援運動を取り上げ、運動に関与した日本人の運動の論理について分析した。分析の結果、運動を支える論理としては戦後責任の追及、イデオロギーをこえた人権の重視、植民地支配への贖罪などがあり、これらは経済発展にまい進した戦後日本社会の主流とは異なるもうひとつの日本社会の様相の一端のあらわれといえる。報告後、林政佑会員から許報告について、市民社会を社会運動のアクターという一枚岩ではなく、警察等の協力者を含め、より実態に即した把握の必要性が、浅野豊美会員からは郭報告をカーターの人権外交による影響など、よりグローバルな枠組みからの捉え直す必要性などが提示され、活発な議論が行われた。
（八尾祥平/ノートルダム清心女子大学）

第8分科会
（自由論題　文学／人類学）

座長：唐顥芸（同志社大学）
報告者１：劉夏禹（一橋大学大学院）
「巫永福の小説「首と体」における都市表現とその機能」
報告者２：沼崎一郎（東北大学）
「インペリアルな台湾想像からポストコロニアルな台湾再想像へ―佐藤春夫『台湾小説集』と瀟湘神『殖民地之旅』を比較して」
コメンテーター１：謝恵貞
(文藻外語大学)
コメンテーター２：阮文雅（東呉大学）

劉夏禹氏の報告は、巫永福の「首と体」における都市表現が、どのように人物の感情の変化を喚起する機能を持っているかを分析した。コメンテーターの謝恵貞氏は、美松百貨店などの歴史的文脈までしっかりと資料を渉猟されている点に大きな学術的ポテンシャルを感じると述べた上で、①佐藤春夫や梶井基次郎を「新感覚派」と同列に扱うなど事実関係や先行研究の精緻化が不十分な点、②経済力や同性愛等の読解に「推論の飛躍」がある点、③当時の留学生の知的水準や歴史的背景の把握が甘い点を指摘した。会場からは、当時東京に留学した台湾人作家が都市生活の享受を描く点や、友情と同性愛は対立ではなくその間にグラデーションがあることについてのコメントがあった。

沼崎一郎氏の報告は、佐藤春夫が台湾を描いた二つの作品と、現代台湾の作家・瀟湘神が佐藤の足跡を辿り、批判的に再描写した批評的エッセイ『殖民地之旅』を比較分析した。コメンテーターの阮文雅氏からは、研究の重要性を肯定した上で、瀟湘神の作品や多層的な理論を用い「文化転換」等の新鮮な視角を示した点を評価しつつ、概念の適用範囲や被植民者の主体性との関係について疑問を呈する指摘があった。会場からは『台湾漫遊鉄道のふたり』と本研究の関連性や、佐藤春夫の「植民地の旅」にはまだ研究の余地が残されていると気づかされる発表である、とのコメントがあった。　（唐顥芸／同志社大学）

第9分科会
（教育学／社会学）
台湾の教育改革と社区営造の融合
公民教育と市民参加

企画者：星純子（茨城大学）
座長：許仁碩（北海道大学）

報告者１：山﨑直也（帝京大学）
「台湾の教育課程改革と学校
―社会関係の再編」
報告者２：星純子（茨城大学）
「台湾の校訂課程における社区営造の参入と
その帰結：高雄市美濃区の小学校を例に」

コメンテーター１：日暮トモ子（日本大学）
コメンテーター２：石井佳奈子（立正大学）

第９分科会では、台湾の教育改革と社区営造の融合について議論した。初めに、山﨑報告は「失敗」と批判されることも多い台湾の教育改革が確実に教育の自由化と民主化を促したこと、教育の規制緩和と分権化によって学校と地域社会の連携強化を早くから訴えてきたこと、その流れが「108課綱」の校訂課程（学校独自カリキュラム）に繋がっていることを示した。続いて星報告は上述の自由化・民主化の理念に基づいて作られた校訂課程が、社区営造の理念やマネジメントと共鳴しつつ、実際には補助金獲得、政府からの承認、少子化の下の学生獲得など競争原理によって実践されていることを報告した。

コメンテーターの日暮会員は日本の学校改革との同時代性を指摘し、台湾の学校と地域の意図のズレや担い手育成の問題などを質問した。同じくコメンテーターの石井会員は、地域連携が子どもの学びや成長の中で持つ意味、学校裁量に対する地域からの評価、資源としてのアイデンティティに関するジレンマについて質問した。フロアからは、そもそも学校とはどのような場所であるか、「教育改革は失敗だった」という言説に対し「社区営造は失敗だった」という言説は存在するかなどの質問があった。（星純子／茨城大学）

第10分科会
（教育学／社会学）
台湾の教育改革と社区営造の融合
公民教育と市民参加

座長：清水麗（麗澤大学）

報告者１：寺尾忠能（アジア経済研究所）
「台湾の環境政策の形成過程における技術官僚の役割：：台湾地区環境保護方案から行政院環境保護署設立まで（1979-1987）を中心に」
報告者２：陳威志（国立中山大学）
「台湾における原発反対運動の転換期の担い手たち：運動がなぜ・どのように継続されたのか？」
コメンテーター１：松本充豊（京都女子大学）
コメンテーター２：田畠真弓（専修大学）

寺尾報告へのコメントでは、権威主義体制研究において政策形成分析が手薄である点をふまえ、台湾の経済発展を支えたテクノクラート李国鼎が、環境政策でも重要な役割を果たし、米国との断交後の関係再構築の手段として環境政策を位置づけていた点が評価された。一方で、それを李個人の特性と見るのか、テクノクラート一般の役割と捉えるのか、また立法院の役割を含めて相対化する必要が指摘された。寺尾は、孫運璿も環境保護に関与しており、権威主義体制下で環境政策が進みやすいという議論との接続は今後の課題だと応答した。

陳報告へのコメントでは、従来の「国民党政権対台湾主体性」という構図を超え、NGO活動の蓄積や地域コミュニティ、生活文化に注目して運動の継続性を分析するフレームの転換が試みられた点が評価された。陳は、質問に答えるかたちで、日本にも地域運動や若者文化を取り込む動きはあるが、東京からは見えにくいと述べ、台湾でも政党対立を利用しつつ政策転換を促す一方、社会全体での対話には課題が残ると指摘した。（清水麗／麗澤大学）

第11分科会
（自由論題　文学／文化複合領域）

座長：豊田周子（名城大学）
報告1：橋本恭子（日本社会事業大学）
「台湾のホームレス・貧困支援における人文的アプローチ」
報告２：李哲宇（名古屋大学・院生）
「連帯の「場」としての俳句会―「台北春燈句会」の発足と加藤山椒魚の指導期間を中心に―」

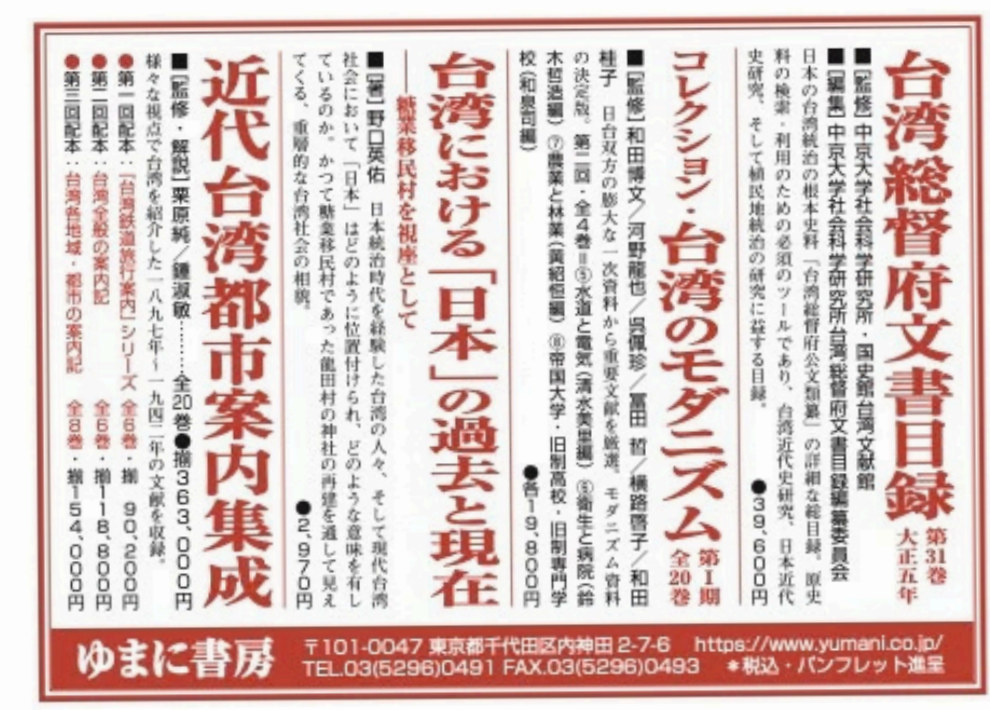
コメンテーター：佐々木孝子（早稲田大学）、岡崎郁子（吉備国際大学）

橋本報告は台湾のホームレス・貧困支援における人文的アプローチについて、また李報告は「台北春燈句会」と指導者の加藤山椒魚に関するもので、ともに未開拓分野に切り込む意欲的な内容であった。

まず橋本報告では、台北の貧困支援における広義の「文学」の役割が論じられた。コメンテーターの佐々木孝子氏からは、「活動の主体」は誰か、「支援する人／される人」の関係性が「非対称」ではないかとの指摘があった。それに対し報告者から、貧困支援の現場では、被支援者が支援者へと移行することが多々見られ、両者の線引きは困難であること、「活動の主体」も両者であるとの応答があった。また、会場からの「近年の文学作品に貧困のテーマが少ないのは、作者の倫理観と関係があるのか」との質問に対しては、むしろ貧困の不可視化が主な原因であろうとの回答がなされた。

李報告では、コメンテーターの岡崎郁子氏から、個々の句会に焦点を当てることにより戦後の台湾俳壇史の流れが明確化される可能性、加藤山椒魚が台湾から強制送還されたという記述の妥当性や、句会会員の証言だけでなく、関係資料に拠り加藤の渡台の背景を検証する必要が指摘された。フロアからは、「台北春燈句会」の様子や日本の句会との相違点について、また日本語世代の参加者が多い結社が連帯を求める意義、白色テロ時代の記述の根拠や石枕の名による遺句集『天の梯子』に関する確認の有無について質疑があった。報告者からは、未確認事項の調査に加え、作成中の系譜一覧の完成とともに戦後の台湾俳壇史を俯瞰するという視座に立ち、日台の関係性について更なる考察と調査を進めたいとの応答があった。

（豊田周子／名城大学）



学会活動報告

※御所属は開催当時のものです

第188回日本台湾学会定例研究会（関東）

日台研究生交流会
（第88回 東アジア国際関係史研究会、第4回中国外交史研究の最前線）

2026年3月8日（日）13:00-17:45

会場：東京大学駒場ヤンパス 18号館4階コラボレーションルーム４

主催：科研費基盤研究（B）「19-21世紀中国の国際秩序観の歴史的変遷と外からの視線」
（研究代表者：川島真）

参加人数：20人

登壇者：吳翎君（国立台湾師範大学歴史学系教授）
川島真（東京大学大学院総合文化研究科教授）
楊鈞量（国立台湾師範大学歴史学系博士候選人、中央研究院人文社会科学博士生菁英培育人才）
陳東昇（国立台湾師範大学歴史学系博士、国立台北商業大学校史館行政専員）
劉漢儀（国立台湾大学歴史学系博士候選人、東京大学大学院総合文化研究科特別聴 講学生）
金子聖仁（東京大学大学院総合文化研究科博士班/日本学術振興会特別研究員）
松尾健司（東京大学大学院総合文化研究科博士班/日本学術振興会特別研究員）

この研究会は、日台大学院生の研究交流を目的とし、主に東京大学と国立台湾師範大学の大学院生を中心に、日台研究生交流会（第88回 東アジア国際関係史研究会、第4回中国外交史研究の最前線）として実施された。対象は台湾史をはじめ、中国史を含む東アジア近現代史とした。会議の冒頭、国立師範大学の吳翎君教授から「工程化中国――跨国工程師、現代基建與日常国家的治理」、また東京大学の川島真教授から「『不平等條約』一詞的起源」と題した基調講演が実施された。こののち、国立師範大学側から楊鈞量「国民政府跨境電政網絡與国家治理，1927-1945」、陳東昇「留日学生與日治時期台湾長老教会的体制改革」、そして台湾大学歴史学系博士課程の劉漢儀「日治前期台湾総督府的本地語言運用及其統治邏輯」といった報告がなされ、東京大学側からは博士課程の金子聖仁「囲繞日本『対華文化事業』的中日外交史（1924-1925）：以『沈－芳沢交換公文』為例」、松尾健司「新疆省官員対国籍籍的理解與辨識：以1920年前後的交涉案件為例」といった報告がなされた。会議を通じて活発な質疑応答が交わされ、今後も大学院生の交流を継続していくこととなった。

（川島真/ 東京大学）

第189回日本台湾学会定例研究会（関東）

第1回台湾研究ブックサロン

2026年4月25日（土）　10:30-15:55

会場：早稲田大学早稲田キャンパス14号館505教室
主催：日本台湾学会・早稲田大学台湾研究所
参加人数：会場38名、オンライン50名

登壇者
三尾裕子（慶應大学名誉教授）、前野清太朗（金沢大学）、河崎眞澄（東京国際大学）、日暮トモ子（日本大学）、八木はるな（中央大学）、張佩茹（東北大学）、呉孟儒（一橋大学院生）、天神裕子（中央大学）、春山明哲（早稲田大学）、清水美里（名桜大学）、和泉司（東洋大学）

定例研究会（関東）の新企画となる台湾研究ブックサロンの記念すべき第1回が、2026年4月25日（土）に早稲田大学早稲田キャンパスで開催された。近年、日本では、様々なジャンルにおいて台湾に関する一般書および学術書（翻訳書を含む）が多数出版されており、台湾社会の多様性を反映した漫画・絵本等も注目を集めている。次々と刊行される台湾関連書籍のなかには、本学会の会員が著者・編者・訳者として関わるものも少なからず存在する。

第1回ということもあり、発表者がどの程度集まるのか、また対話の相手となる聴衆が得られるのかといった点について不安もあった。しかし蓋を開けてみれば、翻訳書を含む硬軟の学術書から一般書、台湾華語の教科書、台湾研究のレファレンスブック、日本文学の台湾語訳、大型叢書の一冊に至るまで、計11冊の書籍が紹介された。対面・オンライン併用での開催となり、参加登録者は100名を超えた。学会外からの参加も多く見られ、本企画は図らずも、近年本学会が力を入れている台湾研究のソーシャル・アウトリーチの実践という性格も帯びる催しとなった。

書籍の紹介時間は1冊あたり20分とし、前半10分で書籍の内容や込められた思い、出版にまつわるエピソード等を語り、後半10分は会場およびオンラインでの参加者との対話に充てる形式とした。各著作に対して多様な角度から質問が寄せられ、活発な議論が展開された。



一方で、学会員の参加がやや少なめであった点は今後の課題として挙げられる。本企画を本学会の名物企画として発展させていくためにも、会員各位のご意見を拝聴しつつ、第2回に向けた工夫を検討していきたい。

（山﨑直也／帝京大学）

第190回日本台湾学会定例研究会（関東）

帝国のスポーツ、植民地のモダニティ
謝仕淵『日本統治期台湾野球史のアルケオロジー:「国球」誕生前記』
刊行記念講演会・特別対談

2026月6月13日（土）14:00～17:00
会場：早稲田大学早稲田キャンパス3号館605号室

主催：早稲田大学台湾研究所・日本台湾学会・SNET台湾・JSPS科研費基盤研究（B）
24K03162（研究代表者：洪郁如）

参加人数：55人

趣旨説明：洪郁如（一橋大学）
司会：松葉隼（福岡大学）
報告者：謝仕淵（国立成功大学）
コメンテーター：菅野敦志（共立女子大学）
コメンテーター：鳳気至純平（国立高雄科技大学）

本イベントでは、『日本統治期台湾野球史のアルケオロジー：「国球」誕生前記』（三元社、2025年）の著者である謝仕淵氏を招き、刊行記念講演および特別対談を行った。

まず、趣旨説明において、洪郁如氏は同書の出版を通じて、単純化されがちな日台関係への理解が深まることへの期待を述べた。次に、講演において、謝氏は野球を通してアイデンティティおよび国民国家の形成を捉える同書の視点を示した上で、植民地台湾における野球環境の整備、野球スターをめぐる言説、大衆化の過程などを分析し、野球が文化統治において果たした役割を論じた。また、自身が行ったインタビュー史料を紹介し、選手の経験から野球史を捉え直す視座を提示した。

続いて、対談において、鳳気至純平氏は謝氏との関係を振り返った上で、戦前と戦後における野球文化の断絶と連続、取材のエピソードなどについて発言した。菅野敦志氏は、台湾野球をめぐる先行研究をまとめつつ、他地域との比較、「国球」の形成や野球の台湾化について問題提起した。質疑応答では、スポーツと女性、社会人野球、沖縄との比較、朝鮮や満州との交流などについて多様な質問が寄せられ、イベントは盛況のうちに閉幕した。

（邱政芃/早稲田大学）

第191回日本台湾学会定例研究会（関東）

台湾有事―言説に踊らされる世論と現実の脅威―

2026年7月24日（金）17時00分～18時30分

会場：目白大学 10号館9階 10900教室

主催者・共催団体：目白大学外国語学部中国語学科、
JSPS科研費若手研究 24K16325（研究代表者：五十嵐隆幸）、基地政治研究会

参加人数：約160人

登壇者：五十嵐隆幸（目白大学外国語学部中国語学科准教授）
黄美恵（中国文化大学国際・外国語学院日本語文学系副教授）

本シンポジウムは、目白大学中国語学科の公開講座として開催された。当日は学内外から多くの参加者が集まり、「台湾有事」をめぐる現状と課題について理解を深めた。講演では、五十嵐隆幸氏が、「台湾有事」という言葉が広まった経緯を歴史的に整理するとともに、台湾海峡問題を軍事だけでなく、歴史、中国政治、台湾社会、国際政治など多角的な視点から考える重要性について解説した。



また、「中国は台湾に侵攻するのか」という問いだけでなく、「なぜ70年以上にわたり大規模戦争が回避されてきたのか」という視点から、台湾海峡の平和と安定を支えるメカニズムについて論じた。五十嵐氏の講演後は、黄美恵氏とのセッショントークを行った。黄氏は、台湾における「台湾有事」の受け止め方や日本社会との認識の違い、台湾の人々が日常生活の中で感じている現実について紹介し、日本と台湾双方の視点から台湾海峡情勢を考察した。

質疑応答では、会場から多くの質問やコメントが寄せられ、講演内容や台湾社会の実情をめぐって活発な討論が行われた。参加者からは、「メディアで伝えられる情報だけでは見えない歴史的背景を理解することができた」といった感想が寄せられた。

（五十嵐隆幸／目白大学）

第192回日本台湾学会定例研究会（関東）

台湾高校教育の最前線

2026年7月20日（月・祝）14時40分～16時10分

会場：日本大学文理学部 本館1階 ラーニングコモンズ
主催者・共催団体：JSPS科研費基盤研究（C）25K05845（研究代表者：日暮トモ子）、
JSPS科研費基盤研究（C）24K05612（研究代表者：山﨑直也）

参加人数：25名
講演者：廖財固（国立台南第一高級中学・校長）

1922年設立の「百年老校」であり、台湾南部屈指の名門高校である国立台南第一高級中学から廖財固校長を招き、「台湾高校教育の最前線」と題する講演会を開催した。当日は日本大学文理学部の学生・教職員、本学会の会員など、20名を超える参加者があり、活発な議論が展開された。廖校長の講演は、「108課綱」（小・中・高校の全段階を含む教育課程の国家的ガイドライン。「108」は中華民国暦の実施年度に由来）を軸とする台湾の教育課程改革の話題を中心に、校則、生徒指導、クラブ活動など、多岐にわたるトピックを含むものであり、高等教育段階に比べ、その詳細が伝えられることが少ない中等教育段階について、最新の事情を知る貴重な機会となった。

「108課綱」の設計思想と特徴（探究学習を核とする教育課程の弾力化）、少子化と普通教育志向の高まりという高校教育の趨勢、生徒の権利尊重と学校の民主化、生徒指導の現代化など、国家レベルでの改革の動きと国立台南第一高級中学の具体的実践をあわせて示すことで、日本の教育を考える上でも示唆に富む内容であり、フロアからも多くの質問が寄せられた。
（山﨑直也／帝京大学）



第95回台北定例研究会

2022年統一地方選挙の回顧―選挙の予測は過去の分析から

2026年６月18日（木）
会場：台湾大学人文館

主催者・共催団体：日本台湾学会、台湾大学台湾文学研究所

参加人数：42名
講演者：小笠原欣幸(清華大学)

台湾選挙研究で著名な小笠原欣幸氏が「2022年統一地方選挙の回顧―選挙の予測は過去の分析から」と題して報告した。今年11月の統一地方選挙を見すえたものだが、前回の選挙を主題としたのは、小笠原氏の「選挙の予測は過去の選挙の徹底的な分析の上に成り立つ」との持論による。

過去のデータの分析、選挙戦の流れの把握、そしてそれらのフィードバックを反映した予測モデルからわかるのは、民進党と国民党の各回の得票率が総統選では大きく変動するのに対して、県市長選での全体の得票率は一定範囲内におさまっていることである。また、前回選挙での民進党の敗因と国民党の勝因、選挙前の各種民意調査の読み方、前回の台北、新竹、台南の各市長選の考察なども説得力があった。全県市長選の現時点での見とおしもしめされたが、とくに新北市長選の結果が両党の勝敗判断や総統選へ向けての情勢に影響を与えそうだとのことであった。

さらに、クオーター制の改正で女性議員が増える可能性、戦況予測もふくめ、この選挙が「台湾のAI選挙の元年」になるのではないかという指摘にも興味をそそられた。

３時間たっぷり密度の濃い話をお聞きすることができた。「台湾選挙検定模擬試験」と題する「余興」も用意され、おおいにもりあがった。　（冨田哲／淡江大学)



会員の研究活動報告

天理台湾学会第35回記念国際研究大会

2026年９月４-５日（金・土）
会場：東呉大学城中校区、中国文化大学延平校区
主催：天理台湾学会
参加人数：約120人

2026年９月４日と５日の両日、台湾・台北市内の東呉大学城中校区および中国文化大学延平校区を会場に、天理台湾学会が東呉大学東アジア地域発展研究センター、中国文化大学日本語文学系との共催で、第35回記念国際研究大会を開催しました。日台の研究者や学生ら、二日間で延べ120名以上が参加しました。

天理台湾学会が台湾において記念研究大会を開催するのは2010年の第20回記念研究大会以来16年ぶりで、2005年の第15回記念研究大会とあわせて、今回が三回目の開催となりました。

大会第一日目は東呉大学で開催され、来賓各位の祝辞に続き、シンポジウム「日台における台湾研究の展望」が行われ、日台の気鋭の台湾研究者６名がそれぞれの専門分野から台湾研究の現在と将来について、学問横断的な視点から台湾研究の展望を示しました。その後、本年８月まで国立台湾歴史博物館館長を務められた、中央研究院台湾史研究所の張隆志先生による「臺灣歷史研究的回顧與前瞻」と題した特別講演が行われました。

二日目は中国文化大学で開催され、午前・午後あわせて20本（発表者は22名）の個別研究発表が行われ、質疑応答では活発な議論がなされました。その後、天理台湾学会の張良澤名誉理事が「談當代臺灣的“魔幻寫實”小說」と題して記念講演を行いました。

日本国内において台湾研究者が集う学会としてもっとも長い歴史を持つ本学会らしく、多くの研究者・大学院生が参加し、あちこちで活発な議論や学術交流が行われていたことが大変印象的でした。

（山本和行/天理大学）



東方台湾語辞典 第 2 版

村上嘉英編著／四六判 572 頁／税込 8800 円 978-4-497-22411-8

台湾教育部による台湾語常用語辞典オンライン版、国立成功大学台湾語検定試験センター認証の難易度明示台湾語単語集（試用本）ほか近年出版された台湾語（閩南語）の辞典、教科書、学習書などを参照の上、2007 年初版の語彙を増補・削減。収録語彙はおよそ 14500 語。



新版 すぐ使える！ トラベル台湾語

（音声ダウンロード方式）近藤綾著／四六判 200 頁／税込 2,420 円 978-4-497-22502-3

前半に、発音・文法の基礎、あいさつ・数の数え方などの基本表現をコンパクトにまとめる。本文会話は全 33 課で「交通・道順」「食べる」「買い物をする」「出張」などのテーマごとに関連表現を解説。旅に役立つコラムも満載！

現代台湾史を掘り起こす、陳耀昌の歴史小説「花シリーズ三部作」



第一作　原題『傀儡花』

フォルモサに咲く花

陳耀昌著／下村作次郎訳／ A5 判 440 頁／税込 2640 円 978-4-497-21916-9

1867 年、台湾南端の沖合で座礁したアメリカ船の乗組員が原住民族に殺害された「ローバー号」事件の顛末。



第二作　原題『獅頭花』

フォルモサの涙 獅頭社戦役

陳耀昌著／下村作次郎訳／ A5 判 352 頁／税込 2640 円 978-4-497-22314-2

1875 年、「開山撫番」政策下で起こった原住民族と漢族の最初の戦争「獅頭社戦役」を描く。



第三作　原題『苦楝花』

フォルモサを照らす月 山脈を越えた帝国

陳耀昌著／石原嘉人訳／ A5 判 224 頁／税込 2640 円 978-4-497-22513-9

舞台を台湾東部に移し、1877 年から 1888 年に起こった原住民族と漢族の 3 つの衝突事件を描く。

陳耀昌小説デビュー作



フォルモサに吹く風 オランダ人、シラヤ人と鄭成功の物語

陳耀昌著／大洞敦史訳／ A5 判 412 頁／税込 2,640 円 978-4-497-22213-8

激動の 17 世紀台湾を、オランダ人マリア、原住民族シラヤの女性ウーマ、鄭成功麾下の漢人・陳澤という三者の視点から描き出す。原題『福爾摩沙三族記』。

WEB 東方

https://www.toho-shoten.co.jp/web_toho

東方書店の WEB マガジン　WEB『東方』

連載「研究会にきく」≫ 中国同時代小説翻訳会/ SNET 台湾/日本杜甫学会/
日本華僑華人学会/東アジア恠異学会/中国古典小説研究会/
中国史史料研究会/日本漢字学会/王昭君研究会

東方書店【中国・本の情報館】https://www.toho-shoten.co.jp/

店　舗 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-3　☎ 03-3294-1001　shop@toho-shoten.co.jp
営　業 〒175-0082 東京都板橋区高島平 1-10-2　☎ 03-3937-0300　tokyo@toho-shoten.co.jp
関西支社 〒564-0063 大阪府吹田市江坂町 2-6-1　☎ 06-6337-4760　kansai@toho-shoten.co.jp

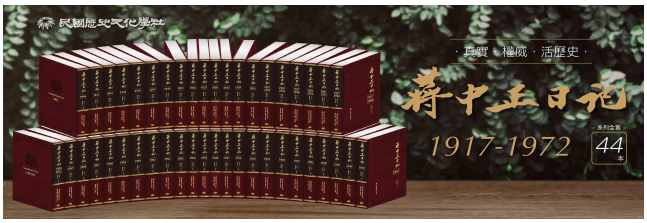
iRead eBooks 【台湾 E-book コレクション】

Airiti “アリティ”が誇る台湾・中国大陸・香港・マカオ・シンガポール・マレーシア・シンガポールなどの 60,000 タイトル以上の eBook コレクションが利用可能です。一冊ずつの買い切り購入のほか割安となる全分野・カテゴリーごとの購読購入もお選びいただけます。ご機関様向けに公費お支払にも対応しています。

2025 年 9 月：インターフェースが一新されました。

全世界向けとして利用者体験の向上を目指すリニューアルです。感覚的に使えて、かつ速度も速く使いやすいものとなっています。日本語タイトルも積極的に搭載中。以下のページから収録タイトルをご確認ください。 https://www.airitibooks.com/





『蔣中正日記』 iRead eBooks

eBook 1917～1972 全 44 巻

アメリカのスタンフォード大学フーバー研究所に所蔵されていた『蔣中正日記』は、2006 年の公開以来、世界各地の歴史研究者の注目を集め、閲覧・研究・活用が盛んに行われてきました。
2023 年 9 月、日記は国史館に返還されました。民国歴史文化学社は国史館から独占的な出版許諾を取得し、いち早く刊行を実現することに。
しかし毛筆による行草体で記された原稿は判読が容易ではありませんでした。
本書は、蔣中正自筆の日記原稿をもとに、民国歴史文化学社が一字一句を活字化し、綿密な校訂を施すことで、原文の姿を忠実に再現しています。
加えて、日記中に登場する人物や出来事については詳細な注釈を付し、理解の便を図るとともに、巻末には索引を収録、読者による調査・参照に役立てられるよう配慮しました。

◆ **権威あるテキスト**
毛筆行草の手稿原本に基づき、逐字的な活字化と専門的な注釈を施した最も正確な版本

◆ **半世紀超の記録**
1917～1972 迄。55 年間に渡る日記を 44 巻に完全収録。20 世紀中国とアジア近現代史を一望

◆ **一次史料としての価値**
政策決定の過程、日々の自省、国際外交の記録など、他の史料では得られない貴重な情報を含む

◆ **PDF 電子書籍形式**
iRead eBooks（華藝電子書）プラットフォームよりオンラインで提供。テキスト全文検索も可能

airiti Library 【台湾 E-journal コレクション】

台湾と中国の学術リソースをプラットフォーム統合した Airiti “アリティ” から台湾発行（一部マレーシア等アジア・世界各地含む）3,000 タイトルを精選した E-ジャーナル・コレクションです。SCIE、SSCI、A&HCI、EI、MEDLINE などの国際的に重要な検索データベースに含まれる、優れたジャーナルを主に収集しました。 https://www.airitilibrary.com/

大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)採択。ほとんどの大学様はコンソーシアム向け大幅割引価格が適用されます。

【NEW】円価格を設定。為替動向に関わらず一定価格となるため購入計画が容易となります。詳細お問い合わせください。

【収録分野・タイトル数】
全 3,080 タイトル(‘26 年 3 月時点)
人文学：949 誌 / 社会科学：1,271 誌 /
基礎応用科学：335 誌 / 医薬衛生学：676 誌 /
生物農学：212 誌 / 工学：299 誌



【主な導入機関】
台湾：600 機関以上（大学では市場占有率 100%。大学以外にも高校、病院、政府機関を含む）
中国大陸：300 機関以上（北京大学、清華大学、中国人民大学 等）/ トライアル実施 2,500 機関
アメリカ：40 機関以上（ハーバード大学、スタンフォード大学、アメリカ議会図書館 等）
日本：‘20 年実施の COVID-19 対応支援：無償アクセスでは 40 もの機関様にご利用いただきました

airiti Library『故宮発行雑誌』

〔故宮学術季刊 / 故宮文物月刊〕eJournal

台北・国立故宮博物院が刊行する二つの中核誌、学術誌『故宮學術季刊』と普及誌『故宮文物月刊』を、台湾最大級の学術データベース Airiti Library（華藝線上圖書館）を通じて提供します。書画・器物・図書文献をはじめとする故宮所蔵品の研究、展覧会情報、文物の保存修復や収蔵の歴史など、故宮博物院を軸とした中華文物研究にとって欠かせない一次情報源です。

◆ **台湾を代表する故宮研究誌**
書画・器物・文献・考古学・博物館学等、故宮所蔵品を軸とした中華文物研究の第一次情報源

◆ **学術誌と普及誌の両輪収録**
専門的な論文を掲載する『學術季刊』と、平易な解説で文物・展覧会を紹介する『文物月刊』共に収録

◆ **長期にわたる収録期間**
両誌ともに 1983 年の創刊号から最新号まで

◆ **E-Journal 形式**
airiti Library（華藝線上圖書館）よりオンラインで提供



文生書院
日本販売総代理店　〒113-0033 東京都文京区本郷 6-14-7
電話(03)3811-1683　Fax:(03)3811-0296　E-mail: info@bunsei.co.jp



蔡英文政権期の台湾

内政・中台関係・国際関係

松田康博・黄偉修 編著　台湾初の女性総統である蔡英文と彼女のチームは、台湾をどのように変えたのか？　蔡英文政権の本質に迫る。　3850円



現代中国という問い

辛亥革命から「中国の夢」まで

村田雄二郎 著　伝統・近代・現代の三層構造からなる巨大な複合国家・中国。多様な相貌を見せる現代中国を歴史から読み解く。　7040円



「人の移動」の国際政治

東アジア冷戦体制の形成と日本華僑

鶴園裕基 著　近代的な主権国家システムが作り出す「国境」と日本華僑との関わりを、歴史的に描き出す。　5500円



台湾総統選挙　増補版

小笠原欣幸 著　台湾メディアで「選挙の神様」と称される学者による、総統選挙研究の決定版。台湾政治の三〇年がこの一冊でわかる！　3300円



「現代村落」のエスノグラフィ

台湾における「つながり」と村落の再構成

前野清太朗 著　日本・中国との異／同比較の壁を超えて、台湾農村から先進諸国に通じる新たな「現代村落」モデルの構築を試みる。　5610円



「歪情報（わいじょうほう）」の政治学

アメリカの台湾政策を読み解く

村上政俊 著　新たな情報モデルである「歪情報仮説モデル」を提唱し、アメリカの台湾政策の変更可能性について理論的に解析。　3080円



冷戦期東アジアの経済発展

中国と台湾

田島俊雄・加島潤・湊照宏 編著　冷戦下の中国と台湾の工業化について、各国の相違に着目しつつその歴史的なプロセスを検証する。　6380円



オランダ植民地統治と法的住民区分の変遷

国籍法と統治法による植民地住民の包摂と排除

吉田信 著　「原住民」と「ヨーロッパ人」を分けるものとは？　植民地住民の法的区分の変遷をたどり、国籍の背後にあるものに迫る。　5280円



日記で紐解く蔣介石の戦時外交

日中戦争と国際関係

陳春松 著　一次史料から、蔣介石の「世界」が見える。対日戦を越え、グローバルな視座で複雑な戦略の全貌を浮き彫りにする。　7260円



新渡戸稲造が立ち会った「国際社会」の誕生

近代日本外交における普遍主義の系譜

湯浅拓也 著　新渡戸稲造が、日本にもたらしたものは何なのか。近代日本外交におけるキリスト者の思想水脈に迫る。　5940円

晃洋書房
〒615-0026　京都府京都市右京区西院北矢掛町７番地
TEL 075（312）0788／FAX 075（312）7447

※表示価格は税込

アジア研究を支える一次資料・AI 検索・新たな視点

台灣聯合百科電子出版会社
美術･文化財関係 オンラインデータベース

Taiwan and Asia's Select HSS Journals　臺灣與亞洲精選人社學刊

台湾全土の人文社会科学分野の主要な学術誌をほぼ網羅しています。
収録誌は約 400 誌 /20 以上の分野におよび、美術史、博物館学、デザイン、視覚文化に関する学術誌も多く収録しています。

National Palace Museum Journals Archive　故宮期刊知識庫

収録年代：1966 年 — current　（収録誌により異なります）
故宮英文年刊、故宮文物月刊、故宮学術季刊、故宮季刊の 4 つの刊行物を中心に、30 万枚の画像、故宮の映像なども収録。AI 画像検索、AI カラー化、文化財用語集などの独自機能を備えています。
美術史、考古学、博物館学、書画研究などにご活用いただけます。

LionArt Digital Archive　雄獅美術知識庫

収録年代：1971 — 1996 年
1970 年代から 1990 年代にかけて台湾で最も影響力のあった芸術雑誌「雄獅美術月刊」を収録。
雄獅図書公司刊行の定評ある『中国美術辞典』、『西洋美術辞典』、『台湾美術年鑑』を含む 12,220 項目の辞典データと、30,000 編の文章も備えています。

Chinese Calligraphy and Inscription Collection　歴代書法碑帖集成

中国歴代の最も有名な 4,268 部の碑帖、700 人の書家、170 万の文字形と解説文を収録し、書道史、漢字文化研究などに資するデータベースです。

台灣聯合百科電子出版会社
United Digital Publications
漢学と台湾研究を専門とし、優れた学術誌や歴史のある雑誌等をデジタル化してきた学術出版社。
全世界で 1200 以上の学術機関が利用しています。

＊各データベースの価格、収録明細などの詳細はお問合せください。

小社 Library Navigator もご覧ください。
https://kw.maruzen.co.jp/ln/ec/ec_udp01.html

日本代理店 丸善雄松堂
MARUZEN-YUSHODO
丸善雄松堂株式会社
学術情報ソリューション事業部　企画開発統括部
e-mail: e-support@maruzen.co.jp

無料トライアル受付中！
（個人・機関ともに 1 ヶ月間）

入退会等（2026年8月1日の常任理事会承認分まで）

非公開

◎ **学会事務局より会員の皆様へお願い**◎
帰国等の事情で学会活動ができなくなった場合には、退会の届け出が必要です。退会される場合には、必ず「退会届」を御提出下さい。提出が遅れると在籍扱いとなり、その間の会費を請求せざるを得ませんので、どうぞ御注意下さい。また、学会活動を継続して頂ける場合は、住所変更の届け出をして下さい。

編集後記

今回も無事にニュースレターを刊行することができました。ご協力くださった会員の皆様に心より感謝申し上げます。次号では、2025年度に博士号を取得した会員の研究紹介を予定しております。該当する会員をご存知の方はぜひ編集委員までご連絡ください。もちろんご本人からの連絡もお待ち申し上げております。
（松田ヒロ子）

今号も執筆者の皆様の御協力により、充実した内容をお届けすることができました。研究大会をはじめ様々な活動が日々行われている様子がお分かり頂けるかと思います。ニュースレターを通して本学会の活動を少しでも身近に感じて頂ければ幸いです。また、昨年からニュースレターの紙面を一新しましたが、個人的にでも結構ですので、感想等をお聞かせ頂けると嬉しく思います。
（吉田真悟）

日本台湾学会ニュースレター 第51号

発行：日本台湾学会（理事長：川上桃子）
発行年月：2026年10月

日本台湾学会事務局
jats.jimukyoku[at]gmail.com
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学東洋文化研究所 松田康博研究室気付

ニュースレター発行事務局
hirokomatsuda[at]gmail.com
〒650-8586 兵庫県神戸市中央区港島1-1-3
神戸学院大学現代社会学部 松田ヒロ子研究室気付